

令和8年度北方領土青少年等現地視察事業

北方領土返還要求運動福井県民会議(事務局:福井県交流文化部インバウンド交流課内)では北方領土に隣接する北海道・道東地域(根室市、別海町等)への訪問を通して、中学生に北方領土問題への理解を深めていただくことを目的に、以下のとおり研修旅行を実施しました。

期間

令和8年7月21日(火曜日)～24日(金曜日)【3泊4日】

主催

北方領土返還要求運動福井県民会議

目的

北方領土問題への理解促進、現地視察を通じた学び

参加者構成

中学生17名(福井市九頭竜中学校)

引率者9名(教諭・推進委員・新聞社記者・事務局)

主な行程

1日目:九頭竜中学校→小松空港→羽田空港→中標津空港、別海北方展望塔



*別海北方展望塔建物前のテラスには、「四島への道 叫び」のモニュメントがあります。「島を返せ」と叫び続ける国民の総意を表しているそうです。

*遠くに国後島がうっすら見えました！別海町の牛乳を使ったソフトクリーム大人気でした！

2日目:道立北方四島交流センター(ニ・ホ・ロ) 元島民2世の方の講話
道の駅スワン44ねむろ、納沙布岬



＊北方四島交流センター(ニ・ホ・ロ)では、国後島出身の元島民2世の原田純子氏より、当時の島の暮らしぶりや旧ソ連軍の侵攻で島から追われた時の体験談のほか現在の心境などについてお話を伺いました。展望室からは国後島や知床半島を間近で臨むことができ展示室では北方領土の歴史や現状を学ぶことができました。

＊本土最東端に位置する納沙布岬から歯舞群島と国後島を望みました。気候条件が良かったので、島々をうっすらではありますが見る事ができたことは貴重な体験となりました。

また、北方領土の早期返還を祈念して建立されたシンボル像「四島(しま)のかけ橋」そして「灯火台」には、沖縄から運ばれた”祈りの灯”が当日もあかあかと燃え続けていました。

北方領土の占領を許すまいとする国民の強い願いと祈りの心を結集し、北方領土が返還されるまで粘り強く返還運動を続ける決意を象徴するために作られたそうです。

＊隣接する公園には、「希望の道」という47都道府県の石が埋め込まれている場所があります。福井県の「笏谷石」を見つけました！

3日目：えとぴりか船内研修、野付半島ネイチャーセンター、標津サーモン科学館



＊元島民の墓参や北方四島との交流事業などに使われる専用船「えとぴりか」に乗船しました！

＊野付半島では、ガイドさんの説明を聞きながら、約3キロの遊歩道を歩きました。

お天気に恵まれ道中では、お花・野鳥の観察ができ、すばらしい青春ショット撮れました！！

＊北海道内でも有数のサケの水揚げ量を誇る標津町。標津サーモン科学館は「サケの町 しべつ」の「サケの水族館」です。

また、世界でも珍しいチョウザメの指パク体験が楽しめる水族館でもあり、みなさんチョウザメに指をパクパクされておりました！

(チョウザメに歯はありません、ご安心を！しかしながら…何とも言えない気持ち悪さだったようです…)

4日目：中標津空港→新千歳空港→小松空港→九頭竜中学校

～参加者からの主な意見～

○北方領土が“近くて遠い”存在であることへの驚き

- ・ 国後島・貝殻島が「目で見えるほど近い」ことに驚いた。
- ・ 近いのに行くことができない現実を実感し、不法占拠の問題を身近に感じた。

○元島民の切実な思いに心を動かされた

- ・ 元島民の「帰りたい」という言葉の重みを強く受け止めた。
- ・ 家や生活を奪われた体験に触れ、戦争の理不尽さを痛感した。
- ・ 高齢化が進む元島民の思いを「今、聞くこと」の大切さを感じた。

○北方領土問題は“現在進行形”であるという理解

- ・ 漁業への制限、拿捕の危険、莫大な協定金の支払いなど、今も地域に影響が続いていることを知った。
- ・ 歴史ではなく「今の暮らし」に直結する問題だと実感。

○北海道の人々の強い返還への思いに触れた

- ・ 資料館や展望台、祈りの火、返還運動の展示から地域の継続した取り組みを知った。
- ・ 北海道では日常的に問題意識が共有されていることを学んだ。

○自分の学びを“周囲に伝えたい”という意識の高まり

- ・ 「無関心でいてはいけない」との気づきが多く参加者に共通。
- ・ 自分事として考え、学んだことを家族や学校などへ広めたいと感じた。
- ・ 次世代へつなぐ必要性を実感した。